

存覚の法華の問答

村上 宗博

『存覚一期記』には、存覚が法華（日蓮宗）の宗徒と法華・念仏の優劣について論戦し、これを打ち破ったことが伝えられ、その内容が、『決智鈔』・『法華問答』にまとめられている。これらの著書を手掛かりに、存覚の『法華経』に対する見解を通して、親鸞の教学の一端に触れたい。

親鸞は、『末燈鈔』第一通に、法華宗（天台宗）に対してはその立場を認め、深い敬意を払う反面、法華の教えは前段階的教説であるとの領解も暗示する。親鸞は、もと天台宗の出身にもかかわらず、その著書に直接『法華経』を引く例はなく、むしろ『唯信鈔文意』『歎異抄』第二条では、『法華経』の教説の内容を希求することを嫌う態度を示す。

『教行証文類』の後序より、親鸞の回心が難行を廃捨したところに成立していることが理解できるが、具体的にはその難行とは『法華経』の教説であったと言える。『法華経』の廃捨が弥陀の本願に帰することであり、山を下りることが吉水での源空との値遇なのである。以下、親鸞の回心の体験の構造を、親鸞が廃捨し帰した法華と念仏をめぐり展開される存覚の法華問答を手掛かりに窺おう。

法華宗からの念仏者に対する謗難は、大きく、出世本懐をめぐる論難と、専修念仏は謗法であるとの論難とに分類できる。前者は、『観経』等爾前の教には得益がなく、爾前方便の教の中でも

『観経』の教説は小乗であって大乘ではなく、断じて頓教・一乗教ではないとの論難で、『法華経』の教説は一乘真実、爾前の教説は三乘方便、それ故、『法華経』の教説こそ真に一切衆生を開示悟入せしめる出世本懐教であるとの立場による。

これに対して存覚は、爾前の経の教説は方便説であり得益はないとする法華の立場を認めるならば、浄土の立場は、念仏の教えこそが私たちを救う真実の教えであるとするから、所依の『観経』は爾前の経であってはならないとし、『法華経』と『観経』との説き同時を立証する。また、存覚にとっては、念仏の教えこそが真の一乗、仏出世の本懐であることは動かしがたい事実であるから、法華の教説が同じく一乗、出世本懐であることを認めるなら、念仏と法華とは全く一体異名でなければならない。そこで、その同一なることを共に一実の仏智であると説明するが、機に応ずるときは二教各別、互いに勝劣があるとする。そして、『法華経』は、聖者のための經典であり凡夫のための經典ではない故、利根の機なら法華で救われようが、今の世にどこに利根の機がいよう、末世に生きる劣機が救われるのは、ただ念仏の教えのみであると主張する。以上は一往の義である。

再往存覚は、出世本懐の意味を吟味し、釈尊の出現は、一切衆生の平等の救済のためであり、それ故、重苦の衆生を救う念仏の教えこそ出世本懐でなければならないとし、『法華』の教説も、最終的には浄土の教えに帰さねばならないとする。釈迦出世の本懐はかぎりて念仏にありとの深い自己省察に基づく宣言である。

次に、専修念仏は謗法であるとの論難については、まず、念仏の行それ自体が無間の業であるとの難には、文証が提示されていないので、存覚はなんの根拠もない非難だと一蹴する。次に、念

仏の行者は、『法華經』を毀謗するから無間に落ち、さらに、『法華經』を謗らずとも、信じなければ罪謗法にあたることと難じる。これに対して存覚は、念仏の行者は、余教を謗ることはなく、また、『法華』を信じなくとも謗法にはあたらないと反論するが、ここで言う「信ずる信ぜざる」との表現は、私は、「行ずる行ぜざる」に解すべきだと考える。念仏の行者は、最終的に法華を行ぜず念仏を行じることが、それは法華を信じないから行じないというのではない。もしそうならば、『法華經』に説かれる謗法の咎は免れない。ところが現実には、私たちに由る行の選択とは、廃捨する行への不信心、選択する行への信賴感の上にしか成立し得ない。それ故、念仏者の廃立に裏打ちされた専修という言葉が、『法華經』を謗るものとして他宗を刺激したのである。しかし、この廃立が仏の手によってなされるなら、決して謗法にはあたらない。ここに、念仏の行の選びが、仏出世の本懷でなければならぬ所以があり、専修念仏をめぐる論難も、結局出世本懷をめぐる問題に落居する。蓋し、念仏の行の選択は、もと弥陀の選択であり、弥陀の本願に基づいている。ならば、私たちの上に成立する念仏の行の選択の過程は、弥陀の本願等流の道程であると言える。弥陀の本願は、行の廃立という形態をとって私たちの上に流出するのである。

『法華經』の教説を廃捨し、念仏を選択するところに成就した本願との出会い。この本願との出会いこそが親鸞の回心、親鸞に実現した救済であった。親鸞の法華・念仏の選択を成立せしめた要因は、深い自己省察であったと考えられるが、その自己省察を迫ったのが『法華經』である。私は、この『法華經』の担っている役割の中でも、特に『法華經』の内包する閉鎖性、差別性が、

私たちの閉鎖性、差別性を如実に見せしめるはたらきをしている点に注目したい。

『西方指南抄』の「聖道門の修行は、智慧をきわめて生死をはなれ、浄土門の修行は、愚癡にかへりて、極楽にむまる」との頷きに、『法華經』の廃捨が、聖者の道である「智慧をきわめて生死をはなれ」ることとの訣別であり、念仏の行の選択が、浄土の道である「愚者になりて往生す」ことであったことが理解できる。さて、「智慧をきわめて生死をはなれ」の問題性とは以下の如くである。智慧をきわめて生死をはなれ」る問題性とは以下の如くである。智慧をきわめて生死をはなれ」る問題性とは以下の如くである。智慧をきわめて生死をはなれ」る問題性とは以下の如くである。私たちの主観にあるが、その基準が私たち自身の中で全く明確になっていない。この曖昧な基準により、私たちは、修行の進捗に一喜一憂する。その判断が過去の自分と現在の自分、さらには予測される未来の自分との間で下される限りにおいてはよいが、それは必ず他者との比較においてなされるようになる。他者との比較において自分の修行をはかることは、必ず勝他の思いを将来する者へ、各々がもつ判定基準の共通部分において他者を虐げ、虐げられる者は、虐げるといふ行為の正当性を甘受せしめられることになり、そのことによって虐げられる者は安堵感を得る。さらに勝他のおもいは、名聞、利養の欲望等を掻き立てる。こうした問題性を孕んでいるにもかかわらず、智者への崇敬の念、智者たりたいのいかんともしがたい願望は、その問題性を覆い隠し、智慧をきわめる歩みを否定することは、怠惰な者、無能な者の嫉みとして一蹴されてしまうのである。「智慧をきわめて生死をはなれ」ることをめざす『法華經』という經典の有する以上のような閉鎖性、差別性に、親鸞は自己の姿を見たのであろう。